



農家の庭先がJAの窓口 (下)

ゲスト/山下 良行 (鹿児島県JA南さつま 代表理事組合長)

第33回ゲスト

鹿児島県 JA南さつま 代表理事組合長
山下良行



やました・よしゆき
1956年鹿児島県生まれ。1978年加世田市農協入組。1993年南さつま農協加世田支所勤務を経て、2006年JA南さつま金融共済部長、2008年参事(管理、金融・共済担当)、2014年参事(総務、金融・共済担当)。2014年常務理事、2017年代表理事専務を経て、2020年代表理事組合長に就任。

●インタビューとまとめ

三重大学名誉教授
京都大学学術情報メディアセンター研究員
石田正昭



いしだ・まさあき
1948年生まれ。東京大学大学院農学系研究科博士課程満期退学。農学博士。専門は地域農業論、協同組合論。元・日本協同組合学会会長。三重大学、龍谷大学の教授を経て、現職。近刊書に『JA女性組織の未来 躍動へのグランドデザイン』『いのち・地域を未来につなぐ これからの協同組合間連携』(ともに編著、家の光協会刊)。



* 前回の記事は [コチラ](#) から

農家の庭先がJAの窓口

家の光協会が提唱するJA教育文化活動は、教育・学習活動、情報・広報活動、生活文化活動、組合員組織の育成活動から構成されている。JA南さつまは、組合員との対話活動を中心にJA教育文化活動を展開し、組織基盤の強化に努めている。今回は、そのような大きな意義をもつJA教育文化活動の実践を山下組合長に語ってもらった。

■対話でつくる「組合員とのつながり」

石田：広報誌『南さつま』に「レインボーニュース」というコーナーがあって、5地区(加世田・大笠・枕崎・知覧・川辺)の広報委員が管内の身近な情報を毎月執筆しています。わたしの思い込みかもしれませんが、5人の広報委員すべてが男性で、とても新鮮に感じました。

山下：このコーナーは2007年12月号から掲載しています。今月でちょうど16年目を迎えました。

石田：ずいぶん息の長い企画ですね。

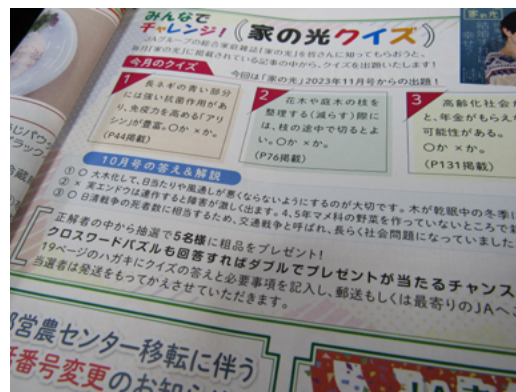
山下：家の光協会が提唱する「教育文化活動」の一つに「情報・広報活動」がありますが、この活動の重要性を本所の担当部署である<くらし広報課>だけではなく、支所を含むすべての役職員に周知徹底するために広報委員制度を設けまし

た。だれを広報委員にするかは各支所で決めてもらっていますが、現在は支所長以下、男性の職員が選ばれています。

石田：もう一点、広報誌には「みんなでチャレンジ<家の光クイズ>」のコーナーがありますが、これも新鮮に感じました。このクイズに応募しようとする、どうしても『家の光』を読まなければいけない。スマートな普及方法だと思いましたが、どなたのアイデアですか。

山下：くらし広報課の西尾あかね課長のアイデアです。ただクイズ自体は彼女の発案ではありません。家の光協会のホームページに掲載されている「お役立ち資料」の「家の光クイズ」の一部を借用しています。

石田：読者の関心を高めるよい企画なので、全国のJAに広げて行ってほしいですね。『家の光』の購読を持続的なものとするには、なくてはならない企画だと思います。



JA広報誌の「家の光クイズ」のコーナー。正解者には抽選で粗品をプレゼントしている

それと、およそ3か月に一回、「庭先対話活動実施中！」が広報誌に掲載されています。JAの役職員が担当地区に分かれ、組合員宅を訪問し、対話のなかで出された意見や質問に対する回答が掲載されています。総代会や地区別総代会のQ&Aはよくみえますが、庭先対話活動のQ&Aは初めてです。

山下：庭先対話活動は2021年11月に始めました。組合員との対話を通じてこれまで以上の関係を築くことを目的としています。

推進ではありません。『日本農業新聞』や『家の光』などの記事情報を携えながら「どうですか、何かありますか」と声かけをしていきます。組合員との話法を知ってもらうために、管理職と一般職員をペアで回らせています。



石田：生協の「コープこうべ」やJA兵庫六甲で行っていますが、いわゆる「御用聞き」のような取り組みですね。もちろん対話だけが目的ではありません。あれこれと世間話をするなかで、担当者からすれば、自分のことを知ってもらうとともに、もしJAにお手伝いできることがあれば、その話を担当部署につないでいくという役割があります。

山下：わたしたちの庭先対話活動のねらいもそこにあります。顔や名前を覚えてもらったら、そのあとは関係をさらに深めることで信頼関係を築いていてもらいたい。「君がいるから、JAと相談するんだよ」という世界をつくってもらいたい。こうした信頼関係の構築なしに、JAの事業利用が伸びるということはありません。JA経営の基本中の基本です。

■ 経営理念の中心に「農家の庭先がJAの窓口」を掲げる

石田：「農家の庭先がJAの窓口」というフレーズが、広報誌、総代会資料、ディスクロージャー誌、ホームページなど、あらゆる媒体に掲載されています。JAの思いが詰まったメッセージなので、その経緯を教えてくださいませんか。

山下：JA南さつまは1998年に発足しましたが、そこから数えて4代目の組合長、わたしからみれば3代前の塗木敏治(ぬるきとしはる)組合長の発案によるものです。2015年のことですが、当時わたしは参事をしておりました。組合員を大事にしていかなければならない——その思いを伝えるような、よい方法はないだろうかと思案するなかから生まれました。

先ほど述べたように、現在、庭先対話活動を展開中ですが、この活動を開始するにあたって、このメッセージを経営理念の中心に据えました。広報誌等に掲載するほか、組合員の集まりや学習会でもしっかり伝えるようにしています。

石田：このメッセージ、全国のJAにとって重要な意味をもっているように思います。というのは、多くのJAで支所数を減らす代わりに訪問活動を増やそうとしていますが、そのときにどういう態度で組合員宅を訪問するのが望ましいのか、そのあり方を示していると思うからです。

山下：横断幕にしてこのメッセージを本所に掲げていますが、今後は各支所にも掲げるようにしたいと思います。

石田：いいですね。道路上からみえるところに横断幕を掲げれば、郵便局や金融機関などには大きな脅威と映るでしょう。JAが訪問活動に本腰を入れているなと感じるはずです。

話はちょっと飛びますが、移動金融店舗車「みなみちゃん号」を2台導入されていますね。大きな投資が必要だったと思いますが、わたしが聞く話では、利用はあまり伸びていないようです。移動金融店舗車を必要とするお年寄りがいることは確かですが、持続性という点では悩ましい問題だと思います。

山下：そのとおりですが、年金振り込みを楽しみにされているお年寄りは少なくありません。わがJAは2022年3月に導入したばかりなので、いまずぐにやめることは考えていません。

ただ、JA南さつまは以前から「年金宅配事業」を行っています。電話でご要望のあったお年寄りに現金をお届けしています。制度上、不祥事につながる可能性があるため、集金はダメですが、年金宅配は可能です。また、職員による宅配はダメですが、臨時職員による宅配は可能です。

石田：知りませんでした。利用者はどのくらいいますか。

山下：登録会員はおよそ380人、そのうち利用者は百数十人です。年金友の会の会員は1万2,700人ですから、利用者が多いとはいえません。

それにお年寄りになると物忘れの方が多くなって、下ろした、下ろさないの世界が広がります。予防策として、ご家族に連絡をとるようにしていますが、もしものことが起これば、この事業は続けられないと理解しています。

石田：送迎車やコミュニティバスを利用してもらうほうがよいかもしれません。

山下：コミュニティバスは南九州市、南さつま市が運行中です。市役所や病院、スーパーなどを回っていますが、Aコープのあるところには必ず金融店舗があるので、そこを利用してもらっていると思います。

■ 仲間の輪が広がる女性部活動

石田：広報誌に「JA女性組織 きらっとおごじよの活動」というコラムが掲載されていますが、女性組織のみなさんが活発に活動されていることがわかります。

山下：「おごじよ」は鹿児島弁で、芯が強くぶれない、やさしい、気立てがよい女性という意味があります。これまでは「JA南さつま女性組織協議会」という形

で旧 J A 単位の活動を続けていましたが、2023年4月14日に晴れて「J A 南さつま女性部」に一本化しました。

それに伴って愛称を「みなみーず」と命名しました。南さつまの「みなみ」と女性の「ミズ」を掛け合わせた造語です。広報誌のコラム名も「J A 女性部みなみーずだより」と改めました。



家の光クッキング・フェスタで料理研究家のきじまりゆうた氏を招いて、地産地消の魅力を伝えてきた

J A としても、グループ助成金、文化教室助成金、専門部会助成金、家活奨励金など、少なからず活動助成を行っていますので、組織の一本化はこうした活動助成の効果的な配分に役立つものと考えています。

現在、女性部員は1,000人を超えていますが、これを機にさらなる部員拡大を図っていきたい。できれば年金友の会に匹敵するような大きな組織に育てたいと考えています。「女性部は拡大あるのみ、女性なくして J A は成り立たない」と事あるごとに話しています。

石田：すばらしい。そんな大きな夢があれば、家の光文化賞をめざしてほしいですね。合併前の旧枕崎市農協が、1956年の第7回家の光文化賞をおとりになった実績もありますから…。

山下：女性部活動が停滞する原因の一つとして、役員になること、これにみなさんちゅうちょされる、そんなことがあるように思います。そのことが原因で部員が離れていったとか、組織が崩れていったという経緯もあります。

それではいけない、考え方を換えよう、とっています。輪番制はやめて、役員はなれる人になってもらおう。口下手な人もいれば、やっかいなことを嫌う人もいる。そういう方々に無理強いはできない、ということで、現在は適任者を選ぶ方式に変えています。

石田：伝統の組織だから、組織の決まりごとを守るのは当然だ、というやり方をくり返しては、新しい仲間づくりはできません。やりたい人が、やりたい人と、やりたいことをやっていく。そうすることで達成感を味わう、というのが J A 女性部の本来のあり方ではないでしょうか。

山下：そのやり方でメンバーが増えているのがフレミズです。

石田：具体的にどのくらい増えましたか？

山下：16人が46人になりました。先生がおっしゃるように、自分たちがやりたいことをやる、自分たちで考えて自主的に行動する、という原則を立てることでメンバーが増え出しました。グループ名も自分たちで決めました。

グループ名はファシーです。「fftac」と書いて、ファシーと読ませます。フランス語の女性(femme)、作る(faire)、時間(temps)、楽しい(amusant)、幸せ(content)の頭文字をとってfftacと名付けました。

石田：フランス語ですか。チャールミングですね。

山下：活動開始は2023年6月。

その時点で「食」「子育て」「趣味」などをテーマとする年間スケジュールを立てて、広報誌で参加者を募っています。毎月一回、原則として午前9時30分から11時30分までの開催、対象は50歳までの女性です。参加費は1回500円、年会費は500円で、どの月からの参加もOK、おためし参加もOKとしています。無料託児も行っています。

石田：すばらしい。行動力が抜群です。

山下：びっくりしたのは、2023年10月7日から17日まで「かごしま国体」が鹿児島市の「白波スタジアム(県営鴨池陸上競技場)」で開かれたのですが、その会場で<手づくりのパウンドケーキ>と<塩こうじクッキー>を販売したことです。特産のキンカンや抹茶を入れたお菓子をつくって、全国から来られたみなさんに南さつまのPRをしてくれました。

フレミズはフレミズの発想で、こういう「たのしい活動」を今後もやっていてもらいたい。また、そうすることでJAファンにもなってもらいたい。そう思っています。

(取材／2023年12月7日、活動の写真提供／JA南さつま)



主体的に活動するファシーでは、魅力ある活動を展開している

「ファシー」から学びたいこと

次世代を担うフレミズのJ Aへの参加・参画は待ったなしの状況にある。そのためには、お仕着せではなく、自分たちがやりたいことを、自分たちで力を合わせてやっていく。そんな自主性の尊重が重要だといわれている。

これをフレミズ発展の「必要条件」だとすれば、今回、「十分条件」があることに気が付いた。その十分条件とは、彼女たちの自主的活動を応援するためにはJ Aの財政的支援が欠かせないということである。

ファシーはファシーで参加費を徴収し、J AはJ Aで一定の財政的支援を行ってはいる。しかし、実際にはこれらの財政的基盤では賄えないことがしばしば起こる。例えば「かごしま国体」への参加がそれであるが、そういうばあいには、ちゅうちょなくJ Aが財政的支援を行っていくことが重要である。

若者だから、楽しければ参加するかというと、決してそうではない。むしろ、若者だからこそ、「財布のひもは固い」とみるべきであろう。みんなが気持ちよく参加するためには、J Aからの「呼び水」が必要と考えるべきではないか。

ちなみに、ファシーの2023年度の年間スケジュールは次のとおりである。

- ・ 6月 アロマでととのう
- ・ 7月 ボタニカルキャンドル
- ・ 8月 親子で木工教室
- ・ 9月 発酵で「腸活」
- ・ 10月 千葉先生の郷土料理
- ・ 11月 ミステリーバスで秋のお出かけランチ
- ・ 12月 冬を楽しむ寄せ植え
- ・ 1月 ちあき先生のおかし教室
- ・ 2月 ワンプレートでCAFÉごっこランチ



子どもたちの夏休みに実施した木工教室も好評